史料紹介と研究

「熊野懐紙」「熊野類懐紙」の模写・模刻

―國學院大學図書館所蔵「久我家文書」および国立歴史民俗博物館所蔵「聆涛閣集古帖」所収史料について―

太田　克也

はじめに

院政期には熊野信仰が流行し、上皇を始めとした貴顕による熊野詣が盛んになった。後鳥羽院もその例外ではなく、幾度も参詣をしている。院の御幸の途次にはしばしば歌会が催され、そこで用いられた懐紙を「熊野懐紙」と言い、正治二年（一二〇〇）と建仁元年（一二〇一）のものが現存する。またこれと作者を同じくし、時期や書式等の体裁が類似するものの、熊野御幸の際のものではない懐紙を指して「熊野類懐紙」と呼んでおり、諸所に所蔵されている。これらは古筆や書道史、和歌文学など、それぞれの分野において高い価値が認められている。

現存する熊野懐紙・熊野類懐紙については、古谷稔「熊野懐紙の研究（上）」（『Museum』一八二、一九六六年）によって、模写・模刻などの写しを含めた全体的な整理が早くに行われた。また和歌文学研究の側からは、田村柳壹「後鳥羽院歌壇前史―「熊野類懐紙」の総合的検討と和歌史上における意義をめぐって―」（『後鳥羽院とその周辺』、笠間書院、一九九八年、初出一九九一年）が熊野類懐紙に絞って集成・検討し、和歌史上に位置付けた。この他、個々の懐紙（写しを含む）に関する紹介や考察が行われている。

これまでの研究では、原本だけでなくその写しも活用されてきた。今後新たに原本が出現する可能性は高くはなく、これからは写しの探索にも注力すべきであろう。そこで本稿では、近世期の模写・模刻である國學院大學図書館所蔵「久我家文書」所収「古筆寫（尊圓親王詩歌寫）」と国立歴史民俗博物館所蔵「聆涛閣集古帖」の中から、熊野懐紙・熊野類懐紙に関わる史料を紹介し、検討を加えたい。

國學院大學図書館所蔵「久我家文書」所収「古筆寫（尊圓親王詩歌寫）」

「久我家文書」は村上源氏の流れになる久我家に伝来した文書群であり、現在は國學院大學図書館に所蔵されている。中世の久我家領関係の文書のほか、宸翰を始め貴族や武家の書状など、極めて貴重な史料が多数含まれている。そのうちの一部は、『久我家文書摘英』第一輯（国史学会、一九三五年）に影印が、『國學院雑誌』（五十八－一―六十九－二、一九五七―一九六八年）に翻刻が掲載され、國學院大學久我家文書編纂委員会編『久我家文書』一―四・別巻（同大学、一九八二―一九八七年）によって全貌が明らかとなった。また重要文化財に指定されるのに伴って、國學院大學図書館調査室編『國學院大學図書館所蔵久我家文書目録』（同館、一九八八年）が刊行されている。

「古筆寫（尊圓親王詩歌寫）」（図書館請求記号：九四五）は、重要文化財指定外文書のうちの「侯爵久我家文書目録」所収文書である。『國學院雑誌』六十九－二では、翻刻は省略されている。以下、簡略な書誌を記す。巻子装一軸。縦29.3㎝×横2144.3㎝。ただし縦は一部にやや差が見られ、横も一紙長は一定しておらず、必ずしも一紙につき一点が写されているわけではない。やや新しめの表紙に外題「古筆写〈君臣／僧俗〉」とあり、本紙も異なる紙質が混じっているので、元は別々に書写・作成したものを、後に集成して一巻に仕立てたのであろう。それぞれの写しの右上には、「一　青蓮院殿尊円法親王」のような内容注記が朱で付されているが、いつ頃注されたのかは不明であり、内容も正確でないところがある。所収される模写は、懐紙のほか古詩歌の写しや書状などがある。熊野懐紙・熊野類懐紙に限っても、本稿で紹介するもの以外の写し（ただし原本が既知）もある。なお本所に影写本［3071.68-6］が所蔵され、内容はそちらでも確認できる。

源家長　熊野懐紙写【図版1】

詠二首和歌

散位源家長

行路氷

いつみかはこまうちわたす
あさこほりほとなくあとそ
むすほゝれゆく

暮炭竈

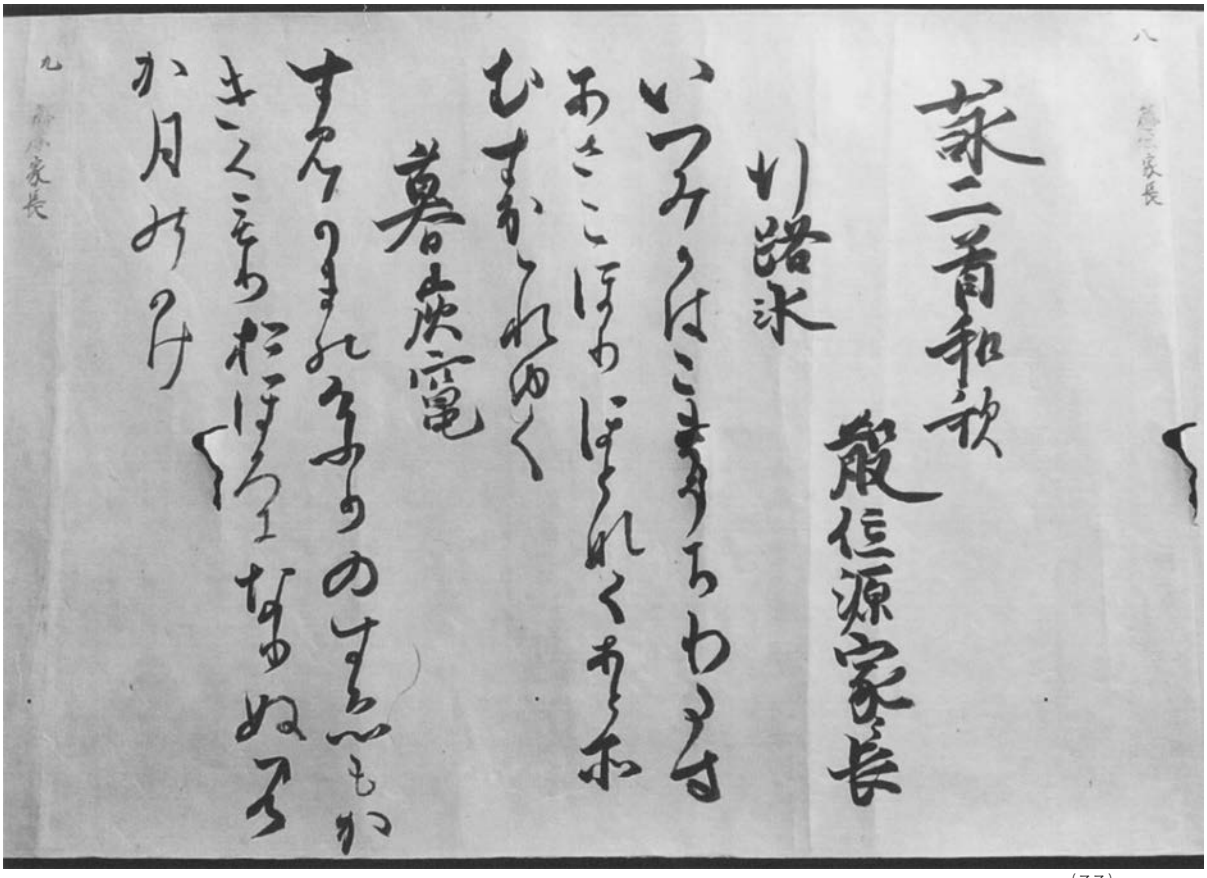
すみかまのけふりのすゑもか
きくもりおほろになりぬみ
か月のかけ

縦29.3㎝×横38.7㎝。この二首は歌題の一致から、正治二年十二月に開かれた会での詠作と判断できる。このときの懐紙は他に、後鳥羽院、藤原家隆、藤原雅経及び寂蓮のものが遺っている。この会における家長の懐紙の存在はこれまで知られておらず、写しではあるものの新出史料となる。また歌自体の他出も確認できないため、家長の詠歌としても新たに追加される。

作者の家長は醍醐源氏時長男、従四位上但馬守を極官とする。後鳥羽院の近臣として活動するが、承久の乱により官を辞し、後に西園寺家に仕えた。歌人としての活動は、承久の乱以前は後鳥羽院歌壇で、乱後は後鳥羽院の旧臣や九条家関係者との間で見られる。ただし彼の名が和歌史上に知られているのは、『新古今集』編纂に当たって和歌所開闔となり、編纂作業に深く関与したという点に尽きる。著作に『新古今集』の編纂過程や後鳥羽院歌壇の様子を仮名で綴った『家長日記』がある[1]。

では、本懐紙写の信憑性について、模写の精度と歌の内容という二つの観点から、以下に検討したい。

まず模写の精度、すなわち筆跡について検討する。家長の手になる懐紙や古筆切は比較的多く遺っているが、本懐紙写の歌会と開催年時の近い「遠山



図版1　國學院大學図書館所蔵「久我家文書」所収「古筆寫（尊圓親王詩歌寫）」（九四五）のうち「八　藤原（ママ）家長」

落葉・海辺眺望」（正治二年十二月三日切目王子和歌会）と「山川水鳥・旅宿埋火」（同月六日滝尻王子和歌会）が遺されている[2]ので、ひとまずそれと比較するのが適当であろう。端作と位署から見ていくと、「詠」「散」の最終画を長く払う点や、「歌」の第六画をやや長く書く点が特徴的であり、本懐紙写でも同様の筆の運びが見られる。それ以外の文字についても、本懐紙写と自筆懐紙とを見比べると、相通じているような印象がある。和歌本文に目を転ずると、例えば「けふり」はいずれの懐紙にも見え、同様の筆遣いになっている。他にも「かは」や「わた」など、数文字単位で見てみても、筆勢には似通うところがあるように感じられる。模写という制約はあるものの、家長の筆跡と見ることに問題のある箇所はなさそうである。

次いで歌の内容、すなわち表現面について検討する[3]。「行路氷」の歌は、会に同席していた雅経詠との関係が窺える表現がある。雅経はこの題で「ふゆざれやしげきのざはのあさごほりこまうちわたすおとのさむけさ」と詠んでおり、家長詠とは二句が一致している。歌会に同席した歌人が共通する表現を用いることは、『堀河百首』などの例が知られているように、よく見られることである。この句の一致は、そのような関係を示すものと言えよう。もう少し表現について見てみると、「泉川」は山城国の歌枕で、現在の木津川をいう。『古今集』の有名な歌に「都いでて今日みかの原いづみ河かは風さむし衣かせ山」（羇旅・四〇八・よみ人しらず）があり、これが旅の歌であることから、「行路」（旅の途次をいう）の題意を満たせると考えたのであろう。また川の朝氷が張ることは、西行の「氷、川の水をむすぶといふことを／川わたにおのおのつくるふししばをひとつにくさるあさごほりかな[4]」（『聞書集』・一二七）が先行例としてある。

「暮炭竈」の歌は、ほぼ同時期に「うちながめふけゆく空やかすむらんおぼろになりぬ春のよの月」（『正治後度百首』・春・九〇二・越前）という歌があり、同百首は家長も出詠しているので、影響関係があるかもしれない。家長詠自体は、炭竈の煙を雲に見立てて月が霞む様を歌ったもので、歌の内容と似た歌題で詠まれたものに「月前炭竈／かぎりあらん雲こそあらめすみがまのけぶりに月のすすけぬるかな」（『山家集』・冬・五四七）がある。炭竈の煙を雲に見立てることと、雲が月の光を遮ることは、それぞれ単体ではよくある趣向であり、それらを組み合わせたところが工夫なのであろう。

以上、簡単な検討ながら、本懐紙写の信憑性について考察した。明らかな不審点は見られないことから、本懐紙写は家長の熊野懐紙を模写したものであると判断してよいのではなかろうか。

後鳥羽院　熊野類懐紙写【図版2】

詠三月和歌

おもふより春のなごり
のをしき哉やよひの
そらも夕やみのころ

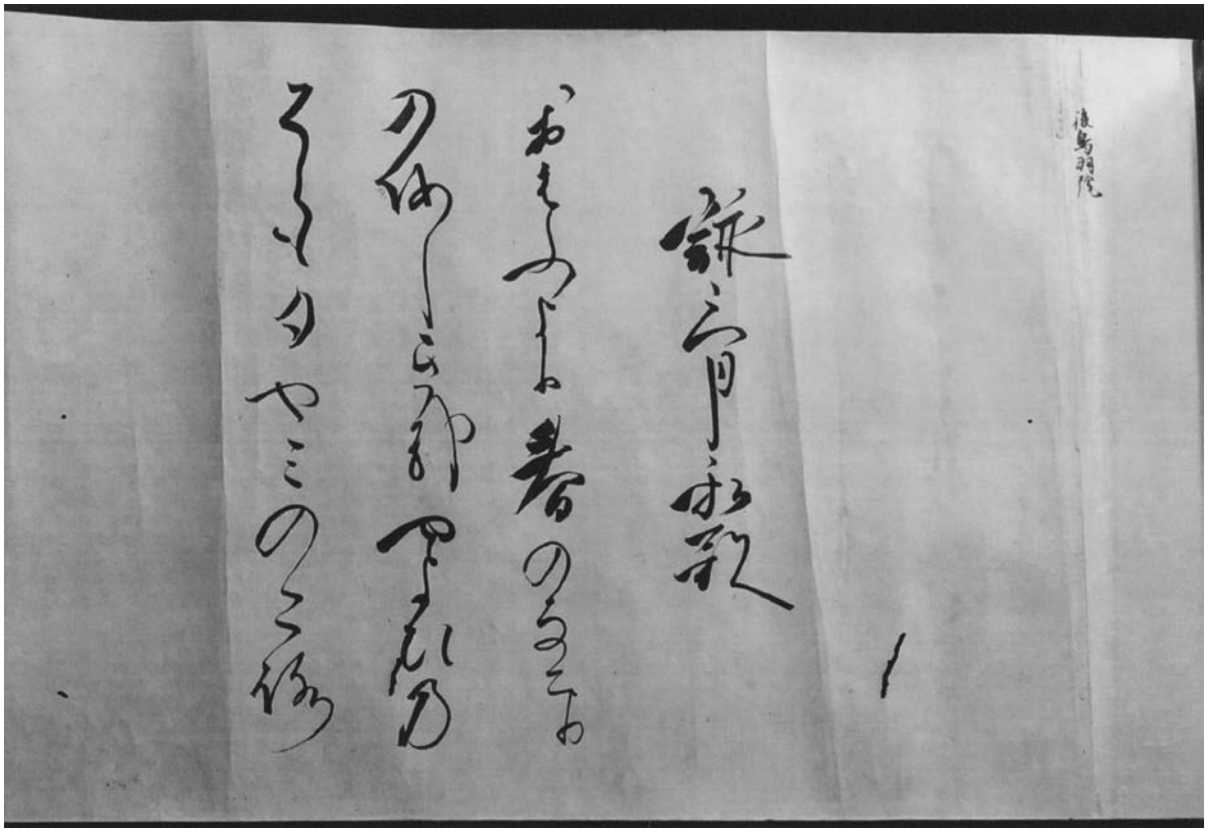
縦29.3㎝×横49.7㎝。これは前掲田村論文が「詠月次和歌」と仮称した一連の懐紙の一つで、正月から十二月の各月を題として、複数の作者に分けて詠じたと考えられているものである。詠作年時は正治二年と推定されている。この歌は従来、江戸時代の鹿苑寺の住持である鳳林承章の『隔蓂記』によって、後鳥羽院の歌として本文のみ知られていた（ただし異同がある）。すなわち承応四年（一六五五）二月三日条には次のようにある[5]。

三日、午時、一条殿下前関白入道公恵観尊公（昭良）被レ召レ寄、御茶給也、龍宝山之玉舟翁（宗璠）・什首座（宗什）・嘉首座也、於二御構之御座敷一、而御振舞也、御掛物後鳥羽院宸翰御詠也、詠三月和歌、如此、御端書也、御歌二、思フナリ春ノ名残リノヲシキ哉、ヤヨヒノ空ノ夕暮ノ比、此御歌也、

従って、本懐紙写は全くの新出ではないが、懐紙の形として残っていることと、本文に相違があることから、研究資料としての価値を有すると言えるであろう。

では、本懐紙写の模写の精度と本文の問題について、以下に検討したい。

まず模写の精度について、筆跡を中心に検討する。「詠月次和歌」には、



図版２　國學院大學図書館所蔵「久我家文書」所収「古筆寫（尊圓親王詩歌寫）」（九四五）のうち「三　後鳥羽院」

もう一つ後鳥羽院筆の「詠六月和歌」[6]があり、それと比較するのが適当であろう。端作では、「詠」の二画目で一旦筆を浮かしている点や文字全体のくずし方、「歌」の運筆などには共通性が見られるように思う。和歌本文では、「ころ」は字母を同じくしていてくずしも似通っている。一方、端作の「月」や和歌本文の「夕」など、やや印象の異なる漢字もある。後鳥羽院の他の熊野懐紙・熊野類懐紙とも比べてみると、似ているところもあればそうでないところもあり、何とも言い難い。全体として筆跡は近似するが、模写態度は厳密ではないのかもしれない。

なお書様はどちらも一首を三行で書く点が共通している。ただし一行の字数は、「詠六月和歌」は初め二行が十二字、三行目が五字であるのに対し、本懐紙写では各行九ないし十字で揃っていて相違がある。これ自体はさほど不思議なことではないものの、一連のものであるのに字配りが異なっている点は気になるところではある。

次いで本文の異同について検討する。まず初句は「思ふなり」（『隔蓂記』）に対して「思ふより」となっている。前者の場合、初句に置くような例は見当たらず、解釈するにしても不自然なところがある。後者の場合、ある程度の用例が見出され、意味を取るに際しても、「つねよりもくれゆく春のをしきかな花ちるさとにたびねするよは」（『為忠家初度百首』・春・旅宿三月尽・一六一・藤原為経）のような、普段よりも強い惜春の思いを表現していると見れば、本懐紙写の本文がふさわしいように思う。

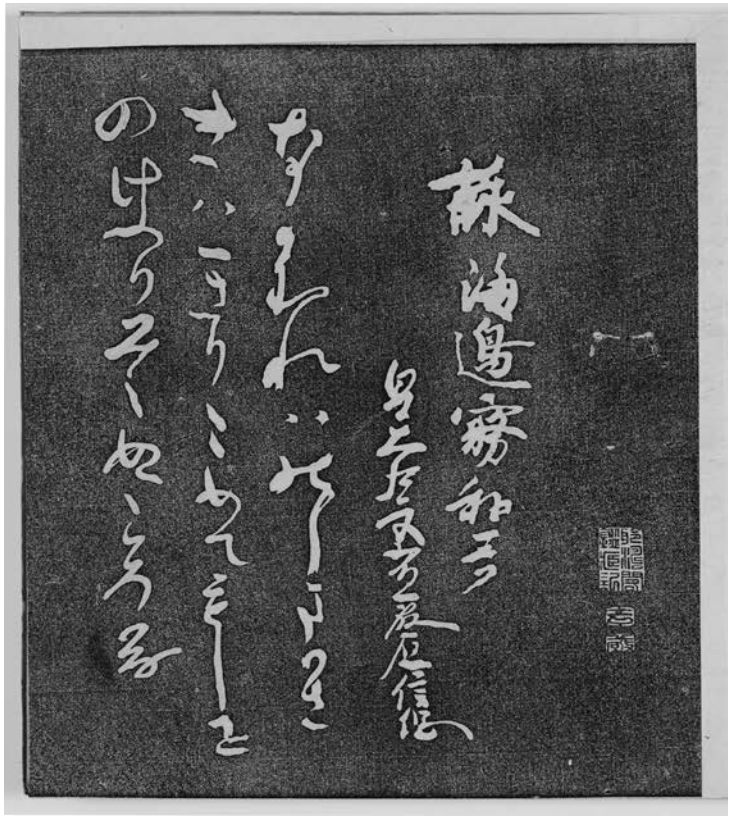
次に下句は「やよひの空の夕暮のころ」（『隔蓂記』）に対して「やよひの空も夕闇のころ」となっている。前者であるとした場合、一首の表現としては自然で、「なにとなくうらみなれたる夕かな三月の空の花の散る比」（『拾遺愚草』・花月百首・六三九）のような近い時期の作例もある。後者であるとした場合、「春の夜、梅花をよめる／春の夜のやみはあやなし梅花色こそ見えねかやはかくるる」（『古今集』・春・四一・凡河内躬恒）という有名な歌もあるが、惜春の思いを歌うのは一般的ではない。とはいえこちらが表現としておかしいとも言い切れず、『隔蓂記』が記録する際によくある表現に

引かれた可能性もあり、なお検討を要する。

以上、これまた簡単な検討ではあるが、本懐紙写の問題点を考察した。精密な模写であると判断するにはやや問題があるものの、偽作とまで言える程でもないので、本文の異同も含めて、今後の検討が俟たれる。

国立歴史民俗博物館所蔵「聆涛閣集古帖」

「聆涛閣集古帖」は、江戸時代の豪商吉田家が編纂した模写・模刻の図譜である。同家が所蔵していたものに諸所から収集したものを加え、約二千四百点を三十二の項目によって分類し、全四十六帖に収めている。この史料については、国立歴史民俗博物館の企画展示「いにしえが、好きっ！―近世好古図録の文化誌―」（二〇二三年）の展示解説図録に詳しい。



図版３　国立歴史民俗博物館所蔵「聆涛閣集古帖」書三帖所収「藤原信綱懐紙」（同館khirinより）

藤原信綱　熊野類懐紙写【図版３】

詠海辺霧和哥

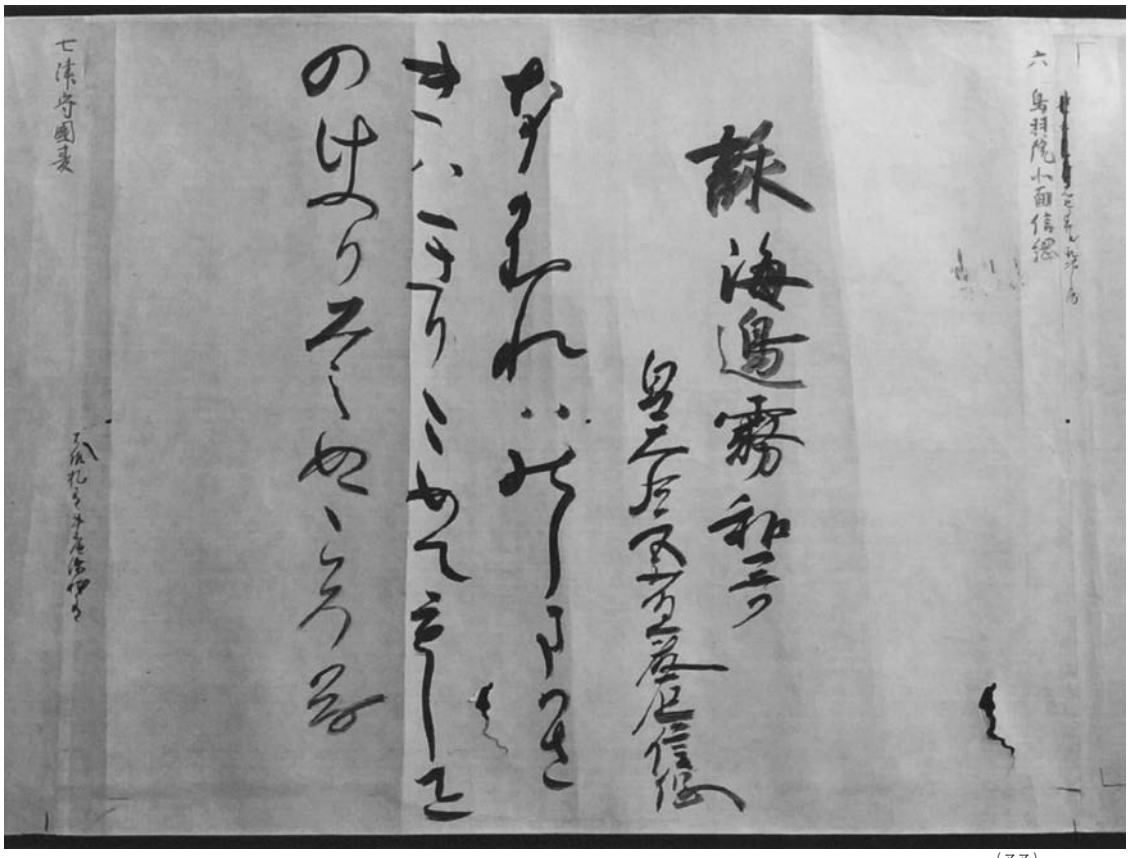
皇大后宮少進藤原信綱

なかむれはのしまかさ
きはきりこめてもしを
のけふりみえぬころかな

縦32.0㎝×横28.0㎝。春名好重編『古筆大辞典』（淡交社、一九七九年）は原本を見ているようで、縦29.7㎝×横46.5㎝とあり、料紙の奥の余白が懐紙の五分の二あるというので、歌の部分のみを模刻したらしい。「書三」帖に収める。印記「聆涛閣／鑑蔵記」「吉敬」（第十七代当主吉田道可の印）も模刻されており、原本はある時期まで吉田家の所蔵であったことが判明する。前掲企画展示に出されており、図録に解説（藤原重雄執筆）がある。その解説に説かれるように、版本『聆涛閣帖』[7]にも陽刻で複製されていて、「藤原信綱〈後鳥羽院北面／新古今作者〉」という注記がある。「集古帖」と『聆涛閣帖』のものを比較してみると、「集古帖」の方は端作の「海」の最終画の末尾が欠けている。版にするときに彫り忘れたのかもしれない。

なお前掲「古筆寫」にも写し【図版４】があり、おそらく『聆涛閣帖』から写されたものと思われる。というのも、「古筆寫」の方は「海」の字が欠けておらず、蔵書印も写されていない。これだけでは原本に拠った可能性もあり得るが、「古筆寫」の朱筆の内容注記に「鳥羽院（ママ）北面信綱」とあり、『聆涛閣帖』の注記に近いものがあって、信綱の閲歴はそこまで著名ではないから、『聆涛閣帖』の注記を受けたものと見てよいのではないか。

本懐紙写は正治二年秋に開かれたと推定されている会のもので、他に家長と藤原範光の懐紙が現存する。信綱懐紙の原本は個人蔵であるが、本文は早くから知られていた。江戸時代には、『群書一覧』「法帖類」に「藤原信綱懐紙」として和歌本文が載せられており（ただし漢字と仮名の宛て方の違いはある）、『古筆大辞典』では和歌本文に加えて端作と位署も明らかにされている。



図版４　國學院大學図書館所蔵「久我家文書」所収「古筆寫（尊圓親王詩歌寫）」（九四五）のうち「六　鳥羽院北面信綱」

その一方で、図版はこれまで公になっていなかった。一九六三年には京都国立博物館「鎌倉時代の美術　絵画と書蹟」展に出陳されたようだが、図録に図版は掲載されていない。原本を見ていると思しき『古筆大辞典』でも図版は省略されている。信綱の他の懐紙に言及する平林盛得「館蔵及び御物の熊野類懐紙について」（『三の丸尚蔵館年報・紀要』五、二〇〇〇年）においても、本懐紙については「図版なし」としている。[8] つまり、これまで懐紙の詳細は『古筆大辞典』の記述から推測するしかなかったわけである。そうすると、本懐紙写（と『聆涛閣帖』所収写）は原本の形態・伝来や流通を窺えるという点で、資料的価値があると言えよう。

作者の信綱は、出自や経歴に不明瞭なところがあるものの、範綱男とされる。従五位下、皇太后宮少進の官歴が確認でき、『明月記』には後鳥羽院の北面として見える。後鳥羽院歌壇の初期の催しにその名が見え、熊野類懐紙が複数遺されている。建仁元年二月に行われた「和歌試」と呼ばれる十首和歌会に出詠するも、歌人としての力量は評価されず、その後は歌壇史上に現れなくなった。[9]

では、本懐紙写の模刻としての精度を検討したい。まず『古筆大辞典』の筆跡に関する記述と照合する。端作・位署・和歌本文に異同はなく、書様において一首を三行に収める点は一致している。また「「詠」の第十二画、「藤」の第十三画、「原」の第二画は特別長く書いている」「第五句の「かな」を小さく書いていることは信綱の「花有悦色」の懐紙の第五句の「かな」を小さく書いているのと同じようである」という点についても、本懐紙写にも同様の特徴が見られ、記述と合致していることがわかる。次いで信綱の他の熊野類懐紙[10]の筆跡と比較してみると、位署では『古筆大辞典』が指摘する「藤」の第十三画と「原」の第二画以外にも、「綱」の最終画にかけて線が伸びている点に共通性がある。和歌本文の仮名では、特に「の（能）」「み」などが似ており、他の仮名にも極端な差はなさそうである。従って本懐紙写は原本の面影をよく残していると判断できる。

最後に表現について簡単に触れておく。「野島が崎」は淡路国（近江国と

する作例もある）の歌枕で、早く『万葉集』に見られるが、院政期に入って詠まれ始めるようになった。季としては秋が多く、「霧隔行船といふこころをよめる／音すなり野じまがさきの霧のまにたがこぐ舟のともろなるらん」（『長明集』・三二）は秋の景物である霧が立ち込める様を詠んでいる。また海人の焼く藻塩の煙は春の霞と見紛うことが多いが、「もしほやくけぶりも霧にうづもれぬすまの関屋の秋のゆふ暮」[11]（『拾玉集』・御裳濯百首・秋・五四三）のように秋の霧であることもあり、こうした例から着想を得たのかもしれない。この慈円の歌にもあるように、海士が藻塩を焼くといえば「須磨」を詠むのが常套的であり、それを院政期になって注目され出した万葉的な「野島が崎」に求めた点が工夫なのであろう。

以上、本懐紙写の模刻の精度を中心に検討した。筆跡からすると、概ね原本に忠実であろうと判断され、原本の図版が公となっていない現状では、それに准ずる価値を有すると言えよう。

おわりに

本稿では、熊野懐紙・熊野類懐紙の模写・模刻を紹介し、内容について検討してきた。新出史料だけでなく、従来懐紙の形態で残っていなかったものも見出すことができ、研究資料として活用することが期待される。やや問題を含む史料もあるが、それは今後の詳細な検討に委ねることにしたい。

熊野懐紙・熊野類懐紙に限らず、特に和歌文学研究においては、模写・模刻の重要性が度々指摘されてきた。近年も久保木秀夫氏の一連の研究[12]があり、新たな知見が提供されつつある。しかし近世・近代の模写や模刻、あるいは好古図譜は多くの種類・数があり、収める内容も多岐にわたるので、とても個人で扱いきれるものではない。「聆涛閣集古帖」が共同研究を行っていたように、学会、延いては学界で取り組むべきことなのではないかとも思う。

註

（1）家長の伝記については、石田吉貞・佐津川修二『源家長日記全註解』（有精堂出版、一九六八年）が基本的な事項を拾っており、稿者も「家長日記の成立と家長本新古今和歌集」（『三田國文』六十三、二〇一八年）において『家長日記』の成立と関わらせて論じたことがある。

（2）追試検証の便宜を考え、国立国会図書館デジタルコレクションの送信サービスで見られるものを挙げておく（以下同じ）。どちらも『墨美』一六九（墨美社、一九六七年）にあり（https://dl.ndl.go.jp/pid/2362489/1/16）。

（3）和歌の引用は『新編国歌大観』に拠り、私に表記を改めたところがある。

（4）『西行法師歌集』では第四句「ひとつにとづる」。

（5）引用は赤松俊秀編『隔蓂記』三（鹿苑寺、一九六〇年）に拠る。

（6）『陽明文庫図録』第一輯（陽明文庫、一九四〇年）にあり（https://dl.ndl.go.jp/pid/1117556/1/5）。

（7）東京国立博物館所蔵本がWeb上（https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/4479）で簡便に見られる。

（8）なお、前掲田村論文の本文集成では翻刻の体裁が本懐紙写と一致するが、「ご編著に紹介された懐紙の原状（字配り・用字など）について春名好重氏よりご教示を賜った」とあるので、図版があったわけではなさそうである。

（9）信綱の伝記は、前掲田村論文及び平林論文に簡略なものがある。また「和歌試」の性格については、有吉保「建仁期の新資料」（『新古今和歌集の研究　続篇』、笠間書院、一九九六年、初出一九七一年）や久保田淳「後鳥羽院歌壇の形成（二）」（『藤原定家とその時代』、岩波書店、一九九四年、初出一九七七年）などを参照されたい。

（10）「花有悦色」（尾上柴舟編『日本名筆全集』十四、雄山閣、一九三二年。https://dl.ndl.go.jp/pid/1194111/1/21）。「暁紅葉」（下中彌三郎編『書道全集』十八、平凡社、一九五六年。https://dl.ndl.go.jp/pid/2475494/1/38）、「正月」（前掲平林論文）など。

（11）第二句「けぶりも霧も」とするが、他出の本文に従って改めた。

（12）「日々是探索～古筆切・写本・たまに版本～」という題で『日本文学研究ジャーナル』二（古典ライブラリー、二〇一七年）以降に連載されている。

（附記）ご所蔵者からは原本閲覧の便宜をお取りはかり頂き、翻刻・掲載のご許可を賜った。ここに記して謝意を表す。

（本所学術専門職員）

図版3出典　国立歴史民俗博物館　khirin　『聆涛閣集古帖』書三
https://khirin-a.rekihaku.ac.jp/reitoukakushukocho/h-1660-10の20コマ目